

防災教育への取り組みと震災時の対応

大船渡市立綾里小学校

前校長 鈴木晴紀

1 はじめに

三陸町綾里は、大船渡市の東部に位置し、リアス式海岸の深く入り組んだ湾と背後にせまる山間の緩やかな傾斜地に集落が散在しており、水産業の町となっている。綾里小学校は海から山手500メートルの平地に位置し、津波浸水想定区域になっている。これより、防災教育への取り組みと震災時の対応について、はじめに綾里地区の津波の歴史、綾里小学校の防災教育について、最後に3月11日の震災時の対応について日頃の防災訓練が実際の避難にどのように活かされたかについて話していきたい。

2 綾里地区の津波の歴史

明治三陸大津波は、地震から18分後に最大38.2メートルの津波が押し寄せ、村民の半数以上に当たる1,269名が亡くなり、家屋は4分の3の被害を受け、まさに壊滅的な被害を受けた。また昭和8年での三陸大津波では地震から10分後に最大23メートルの津波が押し寄せ、180名の方が犠牲になった。明治三陸大津波よりも死者は少なかったがこのときも明治三陸大津波同様に壊滅的な被害を受けた。

そこで綾里小学校ではこの悲劇を風化させないよう防災教育に力を入れ、また津波創作劇や、津波防災看板の設置、津波に関する資料を各家庭に配付するなど地域ぐるみで防災の高揚にも努めてきた。

3 綾里小学校の防災教育

これらの津波の歴史を風化させることのないよう綾里小学校では、防災教育に力を入れている。一つ目は登下校中の避難訓練と津波学習会がある。訓練当日には地域の方の津波体験談を聞き、その後地域毎に集団下校し、地震を想定

した訓練を行っている。子どもたちは、地区担当の笛の合図で建物やブロック塀などから離れ、ランドセルなどで頭を守り、低い姿勢を取り、危機意識を高めている。さらに高台への避難訓練も行っており、それぞれの地区の避難場所の確認をさせている。

二つ目には授業中や休み時間、掃除の時間など様々な場面を想定した避難訓練を行っている。訓練でははじめに校庭に避難し、その後避難場所となっている綾里駅に向かうが、この時高学年から避難するようにしている。低学年から避難するとつまってしまうので常に高学年から先頭になるようにしている。また、津波訓練や津波警報が発令された時などは、地元の消防団が駆けつけてくれ、避難の安全や子供達の交通事故への安全確保に努めてくれている。

三つ目に防災マニュアルの作成と活用である。登校前、登・下校中、或いは授業中に津波注意報や警報が発令されたとき、児童や保護者、教職員がどのように行動したらよいかを示した防災マニュアルを作成し、その活用を図っている。

四つ目に安全マップの作成と活用である。地域の津波避難場所を示した安全マップを作成し、各家庭に配布し、活用を図っている。また各家庭に配布した「我が家の安全マップと約束」には地区の避難場所や危険箇所など記され、毎月1回家族で確認しながら防災意識を高めている。

五つ目に創作劇「暴れ狂った海」の取り組みである。学習発表会などで6年生が明治・昭和の大津波を題材として津波創作劇「暴れ狂った海」を行い、地域の方々に披露し、津波の恐ろしさや命の大切さ等を語り継いでいる。また、津波創作劇が5年生の教科書に掲載され、安全

教育に役立っているようである。

六つ目に家庭や地域への発信がある。明治と昭和の大津波の被害状況や避難場所を記した津波防災看板を駅などに設置し、啓発チラシなどを作って全世帯に配布し、風化しがちな住民の防災意識の啓発にも取り組んでいる。

4 震災時の対応

地震が発生したとき、二日前の余震かと最初は思った。長く激しい揺れが、今まで体験したことのない揺れだったので、津波が来ると思い、揺れがおさまるのを待ち、校庭への避難を指示した。職員は、大声で叫びながら校舎内を走り回り、校庭への避難指示を伝えていた。担任外が教室にいったとき、子どもたちは机の下にもぐり、次の指示を待っていた。その後は、避難訓練通り、担任の指示のもとに誰一人として声を出すこともなく、整然と校庭に避難した。全員の避難確認をし、コミュニティーセンターへと向かった。高学年から避難したので、つまることなくすばやく避難することができた。また消防団が駆けつけ、子どもたちの避難と安全を確保してくれた。本来避難場所は綾里駅だったが、コミュニティーセンターが震災の三か月前に完成し、ここを第2の避難場所としていた。そのうちに津波が防潮堤を越えて押し寄せてきたという情報を得たので、更に高台にある綾里駅に向かった。綾里駅へ移動中、咄嗟に明治三陸大津波のことが脳裏をかすめ、綾里駅に着いてからもさらに線路を跨ぎ、崖をよじ登り、山手の高台へ避難した。山手の高台に避難した後も、余震はさらに激しさを増し、子どもたちは余震と寒さに震えていた。教職員は落ち着かせようと子どもたちに寄り添って絶えず声をかけ続けた。その内に一緒に高台へ避難した保護者から、子どもを帰して欲しいという要望があったが、誰一人帰さなかった。繰り返される余震で子どもたちがかなり動揺していること、地域の被災状況や道路状況が把握できていないこと、高台に避難した今、津波に襲われる心配がないことから帰さなかった。その後、直線距離で約8

00メートル先にあるB&G財団の体育館に避難させることにした。津波で壊滅状態の繁華街を移動することは非常に危険ではあったが、消防団から津波が収まってきている情報を得たので、今居る避難場所からさらに高いところに家がある児童だけを保護者に引き渡し、あとの児童を連れて、消防団の誘導でB&G財団の体育館を目指した。消防団や保護者から情報を収集し、地域の被災状況を把握した。迎えに来た保護者に住居の安全と道路状況、地区の被災状況を確認した上で子どもたちを引き渡した。迎えに来てもらえなかった子どもたち、或いは被災状況がわからない子どもたちは避難場所になっている綾里中学校の体育館に避難させた。綾里中学校の体育館で一夜を明かし、翌朝地区の防災本部へ行き、被害状況を聞いた。地震から28分後に最大30.1メートルの大津波が押し寄せ、21名の尊い命が犠牲になったことを知った。家屋も3分の1が被害にあっていた。21名の尊い命が犠牲になってしまったが、地域住民の多くは地震直後、津波を予想し、素早く高台へ避難し難を逃れたようである。地域ぐるみで防災意識の高揚に努めてきたことが、今回の避難行動に活かされたのではないかと思っている。

5 おわりに

今後の防災教育に求められることとして、一つ目に臨機応変な対応、二つ目に津波警報が解除されない間は、児童と保護者を避難場所に留める、三つ目に様々な場面を想定しての訓練、最後に地域住民を巻き込んでの総合的な訓練が必要でないかと思う。学校再開にあたり、多くの暖かい支援を頂いたことに感謝を申し上げたい。

